

自律的実践で新たな一歩を

上 廣 榮 治

夏七月と申しますと、九州小倉の祇園太鼓、京都八坂神社の祇園祭、相馬野馬追、そして、東京浅草寺の四万六千日……四万六千日で思い出すのが、名人文楽の『船徳』の冒頭、「四万六千日、お暑い盛りでございます」という科白です。たしかに暑い盛りには、大きなお祭りが多いようでございます。それは、暑くて大変だからこそその果報を願ったのでしようし、梅雨から夏への悪疫をお祓いし、あわせて秋の大いなる恵みを期待したからでもあります。

たしかに私たちの人生は辛く大変な時にこそ大いなる成果を培うものです。実践においてもまたしかりです。辛い時、苦しい時、あるいは迷いを生じた時こそが、一番大切な切所なのです。そこを乗り切ることができるかどうか。そこを凌ぎ切つて、さらに前進を続け得るかどうか。それが明日の自分を決めるのです。それ故に、実践倫理では「苦難福門」と申し上げているのであります。

仏教に「諸法無我」という言葉がございます。「諸法」、つまりいろいろな理（実践倫理でいうところ

の大自然の理法)が、さまざまに働きかけあつて、「我」を今あるようにあらしめていなのだ、つまり私だけでこの世にあることはできないということでしょう。

実践倫理もまた、「我」については同じように考えております。例えば私の生命は、父の、母の、さらには遠い先祖たちの生命や願いの結果として、今あるようにあるのです。希望に満ちた未来を願つて、正しく生を送つた人々の生命が、互いに働きかけあつて今日の私に至っている、私はそう思うのです。

もちろん、それだけではありません。社会的な存在である人間は、同時代に生きる人々のお蔭で今あるのです。そして、今ある私たちもまた、私たちの未来と子孫の未来を日々創つていっているのです。

例えば、今あなたが、誰かに酷い仕打ちをしたとします。その人は必ずあなたを憎み、未来において、あなたやあなたの子孫に仇をなそうとするでしょう。すでに、あなたの悪しき働きかけが生じた瞬間に、それは「悪縁」となつて、悪しき未来を創つてしまつたのです。同様に、今あなたが利己的な、倫理に悖る行ないをしたとします。利己的な行為には利己的な行為で對抗するのが世の常です。そうした人がどんどん増えれば、そのぶん社会は倫理から遠ざかり、未来は幸せから遠くなります。

もしあなたが「諸法無我」の理を知つて、周囲の人々を信じ、愛し、我と人が共に幸福であることを願つて、実践に努めたらどうでしょう。それは「善根」となつて、あなたの未来はさまざまな人々の温かい生命と感謝の思いに包まれて、至福のうちに拓けていくに違いありません。あなたの子も孫も、あなたが行ないの「余慶」を受けることになるでしょう。「積善の家に余慶あり」とはこのことです。

では、わが家を積善の家とする第一歩とは何でありましょうか。さらに進んで、倫理社会を創建する第一歩とは何でありましょうか。他者を受け入れ「はい」と答える素直な心、私はそう考えております。それは我意に他意を優先させることであり、他を思い、他を信じて働きかけることでもあります。

しかるに当節では、人の意見を頭から否定して自説を曲げない人が多くなりました。人とかかわり合う最初から、「いいえ」や「いや」で事を壊してしまつては、人と人とのよりよい関係など生まれようもありません。会友諸賢は、このあたりのことはもはや十二分にお分かりのことと思ひます。しかし、私は敢えてもう一度お伝えしたいと思ふのです。と申しますのも、時として「はい」の実践とは「絶対服従」だと誤解しているのではないかと思える会友に出会うからです。それは誤解も甚だしいというものです。私たちの祖先が、父母が、私たちに人に隷属するようになみじめな生を願うはずもありません。また我が会も、倫理的な判断抜きで他者に隷属することをお勧めするはずもないのです。

「はい」の実践とは、他者をよりよく理解するための実践です。「いや」「いいえ」と答えて、互いの心を閉ざすのではなく、「はい」と応えて、相手の胸襟を開いてもらひ、他者の思いと願ひとを鏡に映すように正しく知るための実践なのです。我意は心の鏡を曇らせません。我意のない澄んだ鏡に映し出される他者の心は、多くの場合、私たちにとつて学び反省する資となつてくれるはずです。

かりに相手の心が醜く倫理的に非ざるものであつたとしても、それは私たちのための反面教師となつてくれます。ところが、最初から我意をもつて他者の意見を封じてしまつたとしたら、その人と同じ次元に墮し、しかも往々にして、恨みだけを残す虚しく実りのないさかみを演じることになりかねません。「はい」と受けて、傾聴し、熟考し、得心できたところを行なえばよいのです。

また、「はい」の実践とは、自分の心に我意による波風を立てない訓練でもあります。何事をも虚心坦懐に「はい」と受け入れ、穏やかな心で向き合うことができれば、おおよその困難は克服できるものです。穏やかで静かな心だけが、より正しい道、解決や成就への光明を読み取ることができるのです。

さらに、「はい」の実践は、周囲の人々の好意と温かい生命を抽き出すことができるでしょう。他者

の気持ちを害して、未来に悪縁を残す誤りから免れることができるのです。

すなわち、「はい」の実践は、私たちの今日と明日の倫理的な生活と、我も人も幸せのために行なわれるのです。それは断じて判断の停止でも、絶対服従でもないのです。

ところが、どんなことであろうとも、ただひたすらに上に対しては「はい」と応えていけばいいのだと誤解する人もなかにあります。これは単なる判断停止であり、絶対服従にすぎません。判断停止も絶対服従も、自分の現在と未来とを自ら放棄することではかありません。何のための実践なのか、そこを理解しなければ、その実践は力を持ち得ず、身につくこともありません。「不転の決意で」などと申したところで、その決意自体に中身がないのですから、まず継続も成就も望めるはずがありません。

倫理の実践とは、人に隷属することなく「自立」して、自らを律すること、つまり「自律」することです。自立した自分なくして実践もあり得ません。「はい」も同様に、自立した魂から発する言葉でなければなりません。「はい」と答えて、言われたことを言われただけ行なうのは、自律ではなく他律です。「はい」と受け入れ、よく噛みしめて、倫理に照らして我も人も人の幸せの道を見極め、自分自身の実践を創造していく、それが真の「自律的な実践」です。「はい」はあくまで実践への入口なのです。

人から言われただけのことしかししない人、十年一日の如き会場、いずれも「はい」の実践を曲解しているのではないかと心配されます。倫理の実践とは、もつとダイナミックなものではありません。常に創意工夫が輝き、新たな提案で溢れ、活気ある実践の輪が広がる、そうしたものだと思えます。

各会友、各会場、各地区が真に自立し、受け身の「はい」で終わるのではなく、自主的で創造的な実践を展開してこそ、組織は活性化し、会五十年の歴史をさらに一歩進めることができるのだということ、肝に銘じていただきたいと思えます。いよいよ夏本番、流汗淋漓の普及実践を期待してやみません。